

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K00748

研究課題名(和文) 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動のプログラムと運営手法の研究

研究課題名(英文) Creating sustainable living environments by community-university collaboration

研究代表者

櫻井 典子 (SAKURAI, NORIKO)

新潟大学・教育・学生支援機構・特任准教授

研究者番号：00537003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、申請者が実際に運営する地域と大学の協働活動「新潟大学ダブルホーム」を持続的な住環境形成に資する活動へ発展させていくプロセスの中から有効な活動プログラムや支援手法を構築することを目的とした。活動地域住民の地域愛着、学生への期待、活動に対する意識は概ね高く、学生が地域で活動することは、地域住民に「交流や学生の成長を感じる楽しみ」をもたらしていた。参加住民、学生、教職員への調査結果から継続して活動できる支援環境形成、参加者の負担感を減らしながら信頼関係を構築できる学びのコミュニティ形成、地域住民との対話を重視した地域の思いに寄り添う活動展開の3点が重要であることを見出した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to show a model of creating sustainable living environments by community-university collaboration. Examining the impact of the Niigata University's Double Home Program on sustainability of the regional communities, the studies showed activities with students brought the inhabitants pleasure of socialization and seeing growth of students. The assessments of this program by participants also showed the following three issues are of particular importance: creating supporting system for continuous activities, creating learning community with trust and comfort, and activities placing importance on dialogue between students and inhabitants.

研究分野：衣・住生活学

キーワード：地域と大学の協働 Project Based Learning 大学生の地域活動 まちづくり 地域貢献 持続的住環境形成 学習環境デザイン

1. 研究開始当初の背景

地域と大学の協働活動に関する研究は、地域の活性化や大学の地域貢献・教育的効果を目的とした活動の増加に伴い、その活動プロセス、連携体制、地域再生や教育に対する効果を分析する研究がおこなわれてきている。国内外の多様な事例における地域や学生への効果が報告される一方で、多くの事例が一定期間における計画づくりや地元活動の運営補助にとどまっていることも認められる。計画づくりから脱却して実際の住環境をつくる活動を地域と大学とが協働して持続させている事例を対象とした実践的研究は多くない。そこで本研究は、地域と大学が協働して実際の日常的な住環境を少しずつ改善していく持続的活動へ発展させる手法を明らかにすることを目指した。

本研究対象の新潟大学ダブルホーム(以後ダブルホーム)は、学部・学科という専門分野の学びの場(第一のホーム)の枠を越えて、多様な専門分野に属する学生が教職員とともに第二のホームを運営し、地域活動に取り組む中で人間の成長を目指す正課外プログラムである。平成 27 年度は学生 374 人、教職員 77 人が 17 ホームに属し、新潟県および山形県で地域活動に取り組んだ。学生は卒業時まで参加可能であること、単年度活動ではなく受け入れ地域との活動を継続していること(最長 10 年)も特徴である。

2. 研究の目的

本研究は、筆者が実際に運営する地域と大学の協働活動「新潟大学ダブルホーム」を持続的な住環境形成に資する活動へ発展させていくプロセスの中から有効な活動プログラムや支援手法を構築していくことを目的とした。具体的には、以下の 2 点について明らかにすることを目指した。

(1) 活動地域と活動の実態把握: 対象とする活動地域が持つ社会的・物理的資源や活動組織の可能性を明らかにするとともに、ダブルホーム活動の実態との関連を考察した。

(2) 先進事例から得た有効手法の検証: 先進事例調査や先行研究結果から得られた手法を対象プログラムに導入し、その効果を検証した。どのような活動が参加者にどのような経験や意識をもたらすのか実証的に明らかにした。

3. 研究の方法

本研究は、先進事例に学びながら「新潟大学ダブルホーム」の地域活動を持続的な住環境形成に資する活動へ発展させていくプロセスの中から有効な活動プログラムや支援手法を探るものである。平成 27 年度は、ダブルホームの運営と並行して、ヒアリング調査や参与調査によって先進事例における組織、活動経緯・プログラム、運営手法、活動が創出している物・技術・学習の把握や「新潟大学ダブルホーム」の地域活動としての実

態と課題の明確化を行った。また、「新潟大学ダブルホーム」活動地域の物理的・社会的な住環境の観察調査や対話による地域住人の暮らしと活動へのニーズ調査を実施した。平成 28 年度以降は、先進事例から得た効果的なプログラムや運営手法のアクションリサーチを中心とした検証、ダブルホーム活動の地域への影響の把握調査を行った。以上の調査結果の分析と考察により地域と大学の協働活動に重要な知見を整理した。

4. 研究成果

(1) 活動地域と活動の実態把握

活動地域の実態と活動の関連

4 地域の活動を対象として地域の実態や活動に対する参加者の意識を分析し、ダブルホーム活動が地域コミュニティの維持にどのような影響を及ぼすかを考察した。対象地域では、自然との共生や伝統的な暮らしを大切にして外部の組織を受け入れながらコミュニティを維持していた。年齢層的にも不足している 20 歳前後の学生が地域で活動することは、地域に対する「楽しみと役割の創出」「地域内のつながりへの貢献」「継続的活動がもたらす信頼関係の構築」といったコミュニティ維持への貢献可能性が認められた。

参加住民の地域意識と学生の参加意識

先行研究で「地域の人々とのオープンな関わり」「地域の人々の熱意や期待」「社会人としての取り扱い」といった地域の教育力因子や「住民の地域愛着(持続願望)」が地域と大学の連携活動に重要であることが示されていたことから、地域住民の地域愛着や活動に対する意識と学生の地域活動への取り組み意識を調査し、その関連について考察した。

対象 5 地域の住民への質問紙調査の結果(回答者 83 名) 地域愛着、学生への期待、活動意識の質問項目の合成尺度間の相関は互いに有意な正の相関を示した。各合成尺度の平均点について地域間の差は認められず、回答者は、地域愛着、学生への期待、活動意識いずれも高いことが認められた。活動意識の各質問に対する回答結果からは、ダブルホーム活動を地域全体への貢献や自分自身の学びよりも個人の楽しみとして捉えている人が多い傾向が示された。

対象 5 地域の参加学生への質問紙調査から、活動度が高い学生が多く、活動地域に温かく迎え入れられていること、地域住民の地域に対する思い、活動意義などについては肯定的に捉えている者が多いことが認められた。しかし地域貢献や地域との信頼関係構築については、消極的な回答となっていた。地域住民の地域愛着、学生への期待、ダブルホーム活動に対する肯定的な意識を学生は受け止めていること、また住民同様に自分たちの活動が地域貢献までの活動にいたっていないことを学生も課題に感じていることが示された。

16 ホームの活動と参加者意識の関係

の結果、学生たちも地域に役立つ活動とすることを課題と考えていることが示され、先行研究では地域連携活動に関わる主体（地域、大学教員、学生）が持つ異なる志向のギャップを埋めるための支援や調整が重要であることが報告されていた。これを踏まえ、16 ホームの活動をそれぞれのホームが抱える課題とともに整理し、住民と学生の活動に対する意識とともに分析することで地域の住環境形成に資する活動としていくための支援の在り方を考察した。

平成 28 年度のダブルホーム活動を対象とし、活動拠点と活動内容の特徴から 4 つの型 SE（特定地域行事参加）、SP（特定地域プロジェクト遂行）、ME（複数地域行事参加）、MP（複数地域プロジェクト遂行）型を見出し、学生の経験および学習意識、それぞれが抱える課題を整理した。1 地域で活動するホームは、複数や広域地域で活動するホームよりも地域住民との信頼関係を構築しやすい。一方で行事の減少に直面するなど、行事参加型のままでは持続が困難になっていた。グループ間に有意な差はないが、行事参加型よりもプロジェクト遂行型の方が学生の総合的学習意識の平均点も高い傾向があった。プロジェクト遂行型であっても短期的なものよりも継続的で挑戦的なものが効果的である可能性も認められた。その成果を住民と共に達成していくことも大切であることも示唆され、地域との対話の場を大切に、地域の実情や想いに寄り添いつつ、小さな成果を積み重ねられるようなステップアップを可能とするしくみを構築していく重要性を見出した。

（2）先進事例から得た有効手法の検証

学内・学外の先進事例調査や本プログラムの実態調査から、学生の地域活動へのモチベーションや学習成果を向上させるために、地域との信頼関係づくりやプログラムづくりを含めた支援体制強化の必要性を認めた。また、地域と大学の協働活動に関わる主体（地域、大学教員、学生）が持つ異なる志向から生じる課題への対応の必要性、学生の地域活動への参加意欲や学習深化の向上に向けたしくみやプログラムの重要性を認め、プログラム改善に取り組んだ。具体的には、正課授業と課外活動を往還させつつ活動の質を高めること、インストラクショナル・デザインの視点からの導入授業の改善、ピアサポート体制の活用、地域との対話機会の創出、学生の地域理解とチームワークの促進、目標の設定・共有や省察の強化等である。このような取り組みの中で、地域からの期待や学生たちの自己成長意識も高まりつつあることを認めた。

平成 29 年度末に実施した学生アンケート調査の結果、学年、活動度（自己評価による本プログラムでの活動度）、活動満足度が社会的スキル向上意識に与える影響を検討す

るためにパス分析を行った。この結果、学年が上がること、活動度が高いことが活動満足度を高め、活動満足度が高いほど社会的スキル向上意識も高まる傾向が認められた。また、スキル（問題解決能力や対人関係能力）、パーソナル（個人の成長や学習の充実）、シビック（市民性や社会的責任）、アカデミック（知識の獲得や動機づけ）、インクワイアリー（学術的・専門的探究心）、キャリア（将来計画や実行）の 6 項目の合成尺度の平均点を活動度が低いグループ（1～3）と高いグループ（4～6）で比較する t 検定を行ったところ、全ての項目で有意差が得られた。活動満足度が高く活動度が高まるような活動プログラムの必要性を認めた。

平成 29 年 11 月に活動地域全 17 か所の参加住民に実施したアンケート調査結果（回答者 64 人、回答率 59.3%）から住民の居住地域や地域と大学連携活動に対する考えを整理した。本活動の総合的評価（4 件法）として「良い」「非常に良い」は 55 人（85.9%）であり、今後の活動受け入れ（4 件法）については 61 人（95.3%）が「良い」「非常に良い」であった。本プログラムの学生が地域の活動に参加することについて、学生たちとの交流や成長に楽しみを見出し、自分にとって良い経験になっているという意識が高いことが認められた。居住地域については、少子高齢化、過疎化、若い力の減少、自分たちの取り組みを若い世代に継承していく難しさ、鳥獣被害、空き家の増加、情報や刺激の減少などが課題として挙がっていた。大学の連携活動に対しては、上記のような課題から若者と交流することによる地域の活性化、手伝いだけの姿勢だけでなく新たな視点での提案などへの期待の声が多く挙がっていた。

多くの受け入れ地域は、少子高齢化や世代継承などの課題を抱える中、学生たちとの交流を楽しみにしており、共に活動することで刺激を得ていきたいという思いを捉えることができた。調査結果の考察をさらに進め、今後も地域住民との対話を大切にしながら、地域の思いに寄り添いつつ活動の質を高める支援体制を整えていきたい。

（3）ダブルホームの評価と今後に向けて

平成 29 年度、活動地域住民、参加学生および教職員による本プログラムの評価調査を実施した。この結果、継続して活動できる支援環境形成、参加者の負担感を減らしながら信頼関係を構築できる学びのコミュニティ形成、地域住民との対話を重視した地域の思いに寄り添う活動展開の 3 点が重要であることを見出した。

以上を踏まえ平成 30 年度から、より地域に資する学生たちの主体的取り組みを促進するプログラムを開始した。地域との対話を重視した年間 5 回のベース活動とクラウドファンディングや自治体補助金などの外部資金を自分たちで獲得して地域貢献を目指

すチャレンジ活動である。今後は、この新プログラムを検証しながら、さらなるプログラム改善に取り組んでいく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 12 件)

櫻井 典子、箕口 秀夫、松井 賢二、高橋 秀樹、地域活動を介した学びのコミュニティの 10 年目検証 学生、教職員、地域住民への効果についての考察、大学教育学会第 40 回大会発表要旨集録、査読無、2018、pp.154-155

櫻井 典子、松井 克浩、箕口 秀夫、松井 賢二、高橋 秀樹、正課外の地域活動プログラムにつなげる導入授業の改善、新潟大学高等教育研究、査読有、Vol.8、2018、pp.9-16

櫻井 典子、長期の地域活動 PBL における課題と支援のあり方の考察 - 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動の研究(その 3)、日本建築学会 2017 年度大会 学術講演梗概集、査読無、2017、pp.175-176

櫻井 典子、松井 克浩、箕口 秀夫、松井 賢二、高橋 秀樹、持続的な地域活動プログラムの再構築に向けて 学生の学びと地域状況からの考察、大学教育学会第 39 回大会発表要旨集録、査読無、2017、pp.102-103

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、高橋 秀樹、初年次学生を対象とした地域活動 PBL の成果と課題(その 2)、第 23 回大学教育研究フォーラム発表論文集、査読無、2017、pp.240-241

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、高橋 秀樹、地域活動を介した学びのコミュニティにおける地域活動プログラム改善に関する考察、日本教育工学会第 32 回全国大会講演論文集、査読無、2016、pp.429-430

櫻井 典子、地域活動 PBL における受入地域住民と学生の取り組み意識 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動の研究 その 2、日本建築学会 2016 年度大会 学術講演梗概集、査読無、2016、pp.929-930

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、高橋 秀樹、学生主体 PBL における学生の成長と課題~シンポジウムの企画・運営を通じて~、大学教育学会第 38 回大会発表要旨集録、査読無、2016、pp.102-103

櫻井 典子、地域とつくる新しい学びの場~新潟大学ダブルホームの取り組み~、大学学習教育研究、査読無、2015、pp.61-65

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、地域活動を介した学びのコミュニティにおける地域との関係構築に関する一考察、高橋 秀樹、日本教育工学会第 31 回全国大会講演論文集、査読無、2015、pp.935-936

櫻井 典子、新潟大学ダブルホーム活動にみるコミュニティ維持に学生の地域活動が与える影響 - 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動の研究 その 1 -、日本建築学会 2015 年度大会学術講演梗概集(選抜梗概)、査読有、2015、pp.1319-1322

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、高橋 秀樹、正課学習と正課外活動を組み合わせた PBL の成果と課題の検証、大学教育学会第 37 回大会発表要旨集録、査読無、2015、pp.158-159

[学会発表](計 11 件)

櫻井 典子、地域と大学の連携活動プログラムの新たな展開に対する住民評価からの考察 - 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動の研究(その 4) -、日本建築学会 2018 年度大会(東北)東北大学、2018(予定)

櫻井 典子、箕口 秀夫、松井 賢二、高橋 秀樹、地域活動を介した学びのコミュニティの 10 年目検証 学生、教職員、地域住民への効果についての考察、大学教育学会第 40 回大会(筑波大学)、2018

櫻井 典子、地域活動 PBL における受入地域住民と学生の取り組み意識 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動の研究 その 2、日本建築学会 2017 年度大会(中国)広島工業大学、2017

櫻井 典子、松井 克浩、箕口 秀夫、松井 賢二、高橋 秀樹、持続的な地域活動プログラムの再構築に向けて 学生の学びと地域状況からの考察、大学教育学会第 39 回大会(広島大学)、2017

櫻井 典子、初年次学生を対象とした地域活動 PBL の成果と課題(その 2)、第 23 回大学教育研究フォーラム(京都大学)、2017

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、高橋 秀樹、地域活動を介した学びのコミュニティにおける地域活動プログラム改善に関する考察、日本教育工学会第 31 回全国大会(大阪大学)、2016

櫻井 典子、地域活動 PBL における受入地域住民と学生の取り組み意識 - 持続的住環境形成に資する地域と大学の協働活動の研究 その 2、日本建築学会 2016 年度大会(九州)、2016

櫻井 典子、学生主体 PBL における学生の成長と課題~シンポジウムの企画・運営を通じて~、大学教育学会第 38 回大会(立命館大学)、2016

櫻井 典子、初年次学生を対象とした地域活動 PBL の成果と課題、第 22 回大学教育研究フォーラム(京都大学)、2016

櫻井 典子、松井 克浩、松井 賢二、高橋 秀樹、地域活動を介した学びのコミュニティにおける地域との関係構築に関する一考察、日本教育工学会第 31 回全国大会(電気通信大学)、2015

櫻井 典子、新潟大学ダブルホーム活動に

みるコミュニティ維持に学生の地域活動
が与える影響 持続的住環境形成に資す
る地域と大学の協働活動の研究 その1、日
本建築学会 2015 年度大会（関東）東海大
学、2015

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

（報告）櫻井 典子、多分野の学生・教職
員による地域活動プログラム - 新潟大学ダ
ブルホーム、新潟大学における特色ある取組
、文部科学教育通信、11月27日号、No.424、
2017、pp.22-24

6．研究組織

(1)研究代表者

櫻井 典子 (SAKURAI, Noriko)

研究者番号：00537003

(4)研究協力者

松井 克浩 (MATSIO, Katsuhiko)

箕口 秀夫 (MIGUCHI, Hideo)

松井 賢二 (MATSUI, Kenji)

高橋 秀樹 (TAKAHASHI, Hideki)

西村 伸也 (NISHIMURA, Shinya)